

暮らしに伝統工芸を

日本に古くからある「伝統工芸」。一般的には「高価」で「鑑賞用」と思われがち。そこで、職人が使う人のことを考え、時代とともに進化し続けてきた「伝統工芸」の魅力を紹介します。
【問】ものづくり推進課 ☎626-7538

伝統的工芸品とは

盛岡には南部鉄器をはじめ、長い歴史の中でその技術が培われ、現代に伝わる品がたくさんあります。これらの品々は、日常使いのものから、観賞用まで多岐にわたります。特に盛岡市は、これらに携わる職人や工房が多く、伝統工芸産業が盛んな街として知られています。国はこの伝統と技術を守っていくために、下記のとおり法律に基づいて「伝統的工芸品」を指定しており、盛岡では「南部鉄器」「岩谷堂筆筒」「秀衡塗」「浄法寺塗」の4つが指定を受け、職人の手によって作り続けられています。

▶伝統的工芸品に指定される要件

- 「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」に基づき、次の5つ全ての要件を満たしていること
- ①日常生活で使う工芸品
 - ②作る過程は手作業が中心
 - ③100年以上前から続く技術・技法で作られている
 - ④100年以上前から続く原材料で作られている
 - ⑤一定の地域で工芸品を製造する業者が、ある程度の規模を持っている



5つの要件を満たした製品には、左の伝統マークを使った「伝統証紙」が貼られています。この伝統証紙が貼られている製品は、検査を実施したものであり、品質について誇りと責任をもっている製品です。

承認番号R1-126



◆南部鉄器

昭和50年2月17日指定

約400年前の9代目盛岡藩主南部利雄は、産業や文化に関心が高く、茶の湯釜や釣鐘、大砲などを製造させるため、京都から釜師を招いたのが始まりといわれています。その後、茶釜を小ぶりに改良した鉄瓶が日用品として手軽に用いられるように。南部鉄器の繊細で美しい模様は、手作りの鋳型のももあり、作る人のこだわりが感じられます。また、さびを防ぐため、約900度の炭火の中に鉄瓶を入れて焼く「金気止め」は、南部鉄器特有の技術です。伝統的工芸品の指定を全国で最初に受けています。



◆岩谷堂筆筒

昭和57年3月5日指定

天明年間（1780年代）に岩谷堂城主である岩城村将が米の生産だけに頼った経済を変革しようと、家臣に車付き筆筒や長持などの大型の木工家具を研究させたのが始まりとされています。筆筒の金具は、職人が手打ちや手彫りをして作っており、しっかりした作りに加え龍や虎などの繊細な模様は優美さを感じさせます。また、鍵のかかる金具もあり、金庫としての役割も果たします。ケヤキなどを材料とし、重厚な漆塗りが施されています。年月が経つと漆は色の発色とともに薄くなり、木目の美しさが現れます。



◆秀衡塗

昭和60年5月22日指定

平泉に中尊寺金色堂などの仏教美術をもたらした奥州藤原氏が、京都から職人を招き、この地方特産の漆と金をふんだんに使って作られたのが始まりといわれています。江戸時代後期には、今の奥州市衣川で漆器が盛んに作られるようになりましたが、現在は平泉町周辺が中心です。作業工程は当時のままで、漆器の表面に装飾を加える技法で、源氏雲や草花の模様と金の有職菱紋が描かれています。金箔が施されているため華麗な見た目ですが、光沢を抑えた仕上げは、手にとってみると漆本来の質感を感じることができます。



◆浄法寺塗

昭和60年5月22日指定

神龜5年（728年）に行基が現在の二戸市に八葉山天台寺を建立した時、京都から僧侶が派遣され、自家用の汁椀を作るために漆工技術を伝えたことが始まりといわれています。藩制時代には、南部藩の重要な産物として、天台寺周辺から八幡平市安代地区付近にまで産地を広げ、「御山御器」の名前で知られています。汁椀や飯椀など、普段使いの器が多く、無地で光沢を抑えた質感が庶民の生活になじみ浸透しました。耐久性・耐熱性に富み、木の持つ温かさや柔らかい質感、使い込むことで磨かれる美しい艶を感じることができます。

◆参考：伝統的工芸品産業振興協会・伝統的工芸品の本

受け継がれる匠の技が大集合！

KOUGEI EXPO IN IWATE

全国各地のさまざまな伝統的工芸品や職人が一堂に集まる「KOUGEI EXPO IN IWATE（第36回伝統的工芸品月間国民会議全国大会）」が、岩手では19年ぶりに開催されます。大会では、南部鉄瓶表面の模様や南部鈴竹細工の小物入れなどの製作体験ができます。また、工芸品について普段は聞けないような話を職人から聞くことができる他、全国の伝統工芸士*による新作などの作品展もありです。入場は無料！ぜひ会場で日本の職人の技を感じてください。

*伝統的工芸品の製造をしている技術者のうち、高度の技術・技法を保持する人

【日時】11月3日(日)～5日(火)、10時～17時※5日は16時まで
【場所】アピオ（滝沢市）

詳しくはこちらから！



それぞれの想いを後世へ

～作り手・届け手・使い手～

長い歴史のなかで盛岡で育まれてきた伝統工芸。作る人、届ける人、使っている人にそれぞれの想いを聞きました。

南部鉄器のフライパン



使う

まちの編集室 水野 ひろ子さん



水野さんが、10年間愛用している浄法寺塗のお椀。人肌のような質感を保ちつつ、年数を重ねるごとにツヤが美しく変化

作る

（株）うるみ工芸 代表取締役 藤村 真紀さん



中研ぎの様子

届ける

南部鉄器協同組合理事長 岩清水 晃さん



平成12年から同組合理事長として、南部鉄器を積極的に世界に宣伝。明治35年の創業から115年にわたり、南部鉄器をつくり続けている、株式会社岩鑄（IWACHU）の代表取締役会長



フリーのライター・編集者。所属するまちの編集室で、「てくり」の発行や工芸品のプロデュース・販売を行う

盛岡の普段の暮らしを伝えたいと、雑誌「てくり」を発行して14年目。仕事をきっかけにたくさんの伝統工芸を見て触れて、職人の思いを聞いていくうちに、昔からその土地で作られたモノを使っていきたいと思い、プライベートでも工芸品を使い始めました。今では、取材で職人の話を聞き、その良さを知るたびに買ってしまいます（笑）。毎朝、鉄瓶で沸かしたお湯でコーヒーを入れていますが、普通のやかんで沸かしたときよりお湯にとがった感じがなく、喉にスッと入る気がします。湯を沸かしたあとは、余熱で自然に乾くので、手入れも簡単です。たくさんあるなかから出合ったお気に入りの道具は、日常で使えば使うほど味わいが増し気持ち持ちは豊かに潤し、生活を楽しんでくれます。

長年作り続けられる中で、無駄がそぎ落とされ、洗練された美しい形と、使う人のことを考えて作られた実用性ある工芸品。これからも長く愛用していきたいですね。



水野さんが普段使っている鉄瓶と岩谷堂筆筒の端材を生かした鍋敷き

南部鉄器青年展 ～傍らに鉄を～

南部鉄器工房の若手職人が、若手ならではの感性で作った作品を展示します。職人による作品解説もあります。たくさんの来場お待ちしています！

【日時】展示期間：10月6日(日)～27日(日)、9時～19時
※27日は16時まで

作品解説：13日(日)14時から

【場所】もりおか歴史文化館（内丸）
【問】南部鉄器協同組合 ☎689-2336

会場には、個性豊かなデザイナーの鉄瓶も！

市長コラム 盛岡市長 谷藤 裕明

盛岡には南部鉄器や漆器をはじめとして、長い伝統と高い技術に裏付けられた「本物」がたくさんあります。わが家にも昔から南部鉄器があり、その質の良さは身近に感じているところです。11月に開かれる「KOUGEI EXPO IN IWATE」は、全国の素晴らしい工芸品が集まるまたとない機会。会場で、その良さを目で見て、触って、感じてみてください。

11月1日号の特集テーマは「芸術文化」です。

浄法寺塗のマグカップ

表面のアラレ